

新聞紙を 使った 造形活 動



新聞紙との出会いの演出から新聞紙を使った共同制作活動の構築を通して、「みんなが好きになる図画工作科の授業」の一つのモデルを提示する。

- 須賀川市立仁井田小学校 國井 伸行
- 平成24年6月5日(火) 岩瀬地区小教研図工部会

新聞紙を使った造形活動

1 新聞紙という素材

新聞紙は、身近な生活の中にある 素材である。そのため手に入りやすく、大判の紙を大量にそろえる際には重宝する。また、薄く、軽いので、児童にとっては、ハサミを使わずにちぎる、手で丸める、ものをつつむ、細く巻いてねじる、細く巻いて編む、つなぐ…などの体全体を使った活動を期待できる素材である。

- 大判で軽量の紙素材
- 多様な活動を期待(ちぎる・丸める・ねじる・編む・つなぐ…)

2 材料を制限することについて

図画工作科では、児童に身につけさせる資質や能力を明確にして指導することが肝要である。そのため新指導要領では、(共通事項)が設定された。(共通事項)は、表現及び鑑賞の活動の中で、共通に働いている資質や能力であり、造形活動や鑑賞活動を豊かにするための指導事項である。共通に働いている資質や能力とは、● 形や色などの特徴をとらえる能力● イメージをもつ能力である。

本授業では、あえて新聞紙というある意味でモノトーンの材料に限定した。造形活動においては、材料や活動に制限を加えることによってその活動のねらいが鮮明になり、活動意欲が喚起され、創意工夫が生まれることが多い。初期のパソコン通信で、顔文字が生まれたようにである(^o^)。今回はそれをねっている。つまり高学年を想定している。

- 制限を加えることによって創意工夫が生まれる。
- 色を排することで形についてのイメージが増幅される。

3 共同制作について

「共同して表現することは、様々な発想やアイデア、表し方などがあることをお互い気付き、表現や鑑賞を高め合うことにつながる。活動を設定する場合には、児童の実態を考慮するとともに、児童一人一人の発想や技能などが友人との交流によって一層働くようにすることが大切である。特に、一人一人が共に活動に参加しているという実感をもてるように工夫することが重要であり、決められた部分を受けもつだけで活動が終わらないようにする必要がある。」

小学校学習指導要領解説 図画工作編

共同制作を明確にイメージするための例えに「ご飯とみそ汁」の関係がある。「共同」とは、ご飯とみそ汁のようにそれ自体としてメニューの一つとして成立しながらも、それが合わさることにより、絶妙のハーモニーを奏でる存在である。コーヒーとミルクが合わさりカフェオレになる(融合)のとは違う。



- 独立した一つ一つの作品が奏でるハーモニーが共同制作

共同制作の意義は、何であろうか。一つ目は 造形を通しての人間関係づくりが挙げられる。一人で制作するときと比べ、共同制作では児童相互のコミュニケーションが欠かせない。共同制作をする前に、指導者は、児童の交遊関係等の実態を把握し適切なグルーピングを行わなくてはならない。また、日常の学級経営での人間関係づくりの大切である。二つ目は、児童が スケールの大きさによるダイナミックな造形体験をすることが挙げられる。大きな材料を準備や、広い空間の場を設定することにより、ダイナミックな造形活動を行うことができる。三つ目は、学校における造形文化の形成が考えられる。例えば、教育活動に計画的に共同制作を組み入れる。新聞紙を使った造形活動の体験が、卒業制作に発展することも考えられる。

- 適切なグルーピングで人間関係づくりに配慮
- ダイナミックな造形体験
- 学校の造形文化の形成

さて、グルーピングの留意点は何であろうか。大切なのは、児童任せにしないことである。授業には必ずねらいがある。そのねらいや題材、場の特性に合った適切なグループを編成するのは、教師の仕事である。「なかよしグループ」がよい造形活動を行うとは限らない。むしろその逆のケースも多い。必要以上に相手に合わせてしまうこともあるし、おしゃべりだけで終わってしまうこともある。また、グループには入れない児童に対して、「一人でもいいし、友達でやってもよい」という指導も好ましくない。生徒指導を機能させながら、共同制作のよさを指導者は、きちんと指導しなくてはならない。

グループは、題材によって、ペア(2人)、班(3~5人)、○号車(学級を2~3に分ける)など、児童がそのグループに所属することに納得できるものとスムーズに造形活動に入ることができると思われる。必要があれば教師が支援すればよい。図画工作科の中でつくる児童の作品は、ある意味で教師と児童の共同制作である。



■ グループの構成を子ども任せにしない

最後に共同制作の評価について考えたい。そもそも子どもが作った作品を評価できるのかという昔からの議論があるが、何も指導をせずの子どもに作品をつくらせたのなら「その通り」である。授業にはねらいがあり、指導者は児童に身につけさせたい資質や能力をもとに指導を行う。昨今は、観点別に評価規準がある。したがってそれをもとに評価を行う。逆にいえば、指導していないことは評価できない。理想を言えば、自己評価できるとさらによい。しかし、それには、「この世に完璧なものなどない。」ことや、「自分のよさ」を児童がしっかり認識できるよう日頃から児童に語りかけるとともに、評価規準を分かりやすく示し、児童の自己評価能力を高めることが不可欠である。それには、相互評価も段階的に取り入れ、自分以外の声にも耳を傾けることの大切など指導しておくことも大切であろう。

そのようにして培った自己評価能力や相互評価能力を共同制作においても活用して評価することが望ましい。

- 図画工作科の評価は、指導した事項に対する評価
- 評価カード等を用いた自己評価、や相互評価

※ 参照: 図画工作と水彩画の國井伸行ホームページ NOB'S PALETTE (「國井伸行」で検索)